

伝統医学の社会実装とDXの最前線： インドWHOサミット報告と「責任あるAI」への展望



吉野 鉄大

Tetsuhiro Yoshino

慶應義塾大学医学部漢方医学センター特任講師
(全人的漢方診断共同研究講座)

2025年12月、インド・ニューデリーで開催された「第2回 WHO 伝統医学グローバルサミット」において、最大の焦点となったのは伝統医学を各国の国家保健医療システムへ統合するための「AI とデジタル技術の活用」でした。世界的なリーダーシップのもとで伝統医学のデジタル化（DX）が凄まじい熱量で推進される一方、セッションの底流では「責任あるAI」や、テクノロジーが伝統知にもたらす歪みについての本質的な議論が交わされました。

現代の西洋医学においては、高度な検査技術によって多くの病態が可視化される一方、検査数値に異常が現れない「未病」や原因不明の不定愁訴（Medically Unexplained Symptoms, illness, やまい）に対しては、アプローチが限定的になりがちです。演者は普段、西洋医学の内科医をベースとして漢方外来を実践していますが、現代医療の標準化された枠組みからこぼれ落ち、一種の「切り捨て」を経験した患者たちが、最後の拠り所として漢方やアーユルヴェーダをはじめとする伝統医学・統合医療の外来を訪れる現状を日々痛感しています。西洋医学的な客観データの偏重によって患者個々の主観的な苦痛が不可視化されてしまう構造は、現代の医療システムが抱える大きな課題であり、同時に DX がもたらす最大の死角でもあります。伝統医学が有する「患者の主観や個別の文脈を汲み取る力」は、まさにこの死角を埋めるために不可欠な哲学であり、漢方とアーユルヴェーダが共通して持つ最大の強みに他なりません。

本講演では、同サミットのパネル登壇で議論した「責任あるAI」の世界的潮流を報告するとともに、当科が推進する漢方DXの実践例を紹介します。臨床におけるAIは、典型的な症例では高い予測精度を誇りますが、複雑な病態や「非典型例」に対しては正解率が極端に低下することを確認しています。デジタル化の過程でこぼれ落ちる、数値化しにくい「主観データ」や「文脈」をどう扱うべきか。AIを単なる効率化の道具に留めず、伝統医学が共通して重んじる「全人的（ホリスティック）な調和」や、数値化しにくい「個別の文脈」を損なうことなく社会実装するための技術的・倫理的課題について、インド現地の圧倒的な熱量と共に考えていきたいと思います。

略歴

2008年慶應義塾大学医学部卒業。同大学病院初期臨床研修を経て、内科学と漢方医学を専攻。2016年慶應義塾大学より博士（医学）学位取得。同年マンチェスター大学 HeLC 短期留学、2017年オレゴン州立大学薬学部・ライナスポーリング研究所訪問研究員。2018年より慶應義塾大学医学部漢方医学センター特任講師。厚生労働科学研究費やAMED等の政府系研究資金において分担研究者を歴任するほか、WHOの「AI for Health」トピックグループメンバー、WPRO 臨時顧問として伝統医学のデジタル・AIイノベーションに関する国際政策提言に参画している。
【受賞歴】2024年米国内科学会（ACP）Global Physician Scholar として米国の統合医療クリニックの視察、同年日本東洋医学会奨励賞、2026年和漢医薬学会学術貢献賞など。

所属団体等

日本東洋医学会（研究推進委員会委員長、参事、代議員、学術教育委員会委員）、米国内科学会（In The Clinic 翻訳企画 QC チームリーダー、日本支部 Public Relations Committee アドバイザー・元副委員長）、和漢医薬学会（学術大会プログラム委員、若手研究者の会世話人）、国際代替医療研究会（ISCMR：Research Advisory Committee、Research Prize Reviewer）、国際日本漢方学会（ISJKM）。
国際学術誌「Global Advances in Integrative Medicine & Health」Associate Editor（2025-2028）、「Traditional & Kampo Medicine」Associate Editor（2023-現在）。

資格・肩書等

医師、博士（医学）
日本内科学会認定内科医
日本内科学会総合内科専門医・指導医
日本東洋医学会漢方専門医・指導医
ECFMG Certificate（米国医師資格認証）、STEP3合格
慶應義塾大学医学部医学教育フェロー
統計検定2級
知的財産管理技能士3級
JSA ワインエキスパート